



昭和 28 年 熊本市生まれ。崇城大学卒。国会秘書を経て県議会議員 5 期を終え現在は引退。宮本武蔵継承二天一流 21 代師範、剣道教士 7 段、居合道 5 段、杖道 3 段

「驚恐疑惑 弛怒焦」この七つの絵を相手の手に置くことが極意だと述べている。武蔵の最後の決闘として有名な、佐々木小次郎との厳流島での決闘。この決闘の中で、武蔵はこの七絵を小次郎の心に置くことを計算していた。決闘の日、小次郎は日の出と共に床を蹴って起き上がり、身支度を調え、神に祈りを捧げ、厳流島に赴いた。一方の武蔵はこの時、船宿でまだ寝ていたといわれる。

「驚恐疑惑 弛怒焦」この七つの絵を相手の手に置くことが極意だと述べている。武蔵の最後の決闘として有名な、佐々木小次郎との厳流島での決闘。この決闘の中で、武蔵はこの七絵を小次郎の心に置くことを計算していた。決闘の日、小次郎は日の出と共に床を蹴って起き上がり、身支度を調え、神に祈りを捧げ、厳流島に赴いた。一方の武蔵はこの時、船宿でまだ寝ていたといわれる。

「地の巻」は武蔵の生涯や兵法について書かれていて、まっすぐな道を地

「宮本武蔵と五輪書」

第八十二回 さつきセミナー

平成 29 年 5 月 25 日

講師 荒木あきひろ先生

面を書くというところにぞらえている。「水の巻」は心の持ち方、太刀の持ち方や構え、独自の二天一流の型について「火の巻」は合戦の兵法について、「風の巻」は他の流儀との比較について、「空の巻」は究極の極意の原点、についてそれぞれ書かれている。また、武蔵は七絵を自らに置くこと

「驚恐疑惑 弛怒焦」この七つの絵を相手の手に置くことが極意だと述べている。武蔵の最後の決闘として有名な、佐々木小次郎との厳流島での決闘。この決闘の中で、武蔵はこの七絵を小次郎の心に置くことを計算していた。決闘の日、小次郎は日の出と共に床を蹴って起き上がり、身支度を調え、神に祈りを捧げ、厳流島に赴いた。一方の武蔵はこの時、船宿でまだ寝ていたといわれる。

「驚恐疑惑 弛怒焦」この七つの絵を相手の手に置くことが極意だと述べている。武蔵の最後の決闘として有名な、佐々木小次郎との厳流島での決闘。この決闘の中で、武蔵はこの七絵を小次郎の心に置くことを計算していた。決闘の日、小次郎は日の出と共に床を蹴って起き上がり、身支度を調え、神に祈りを捧げ、厳流島に赴いた。一方の武蔵はこの時、船宿でまだ寝ていたといわれる。



平成 30 年度事業計画

- 5月24日(木) 第86回 さつきセミナー 演題「日本を取りもどす教育」 講師 高橋史朗先生
- 6月21日(木) 第24回 社会文化研究会 演題「我が人生は人持ち」 講師 上野賢氏
- 7月10日(火) 映画鑑賞とお食事の夕べ
- 7月19日(木) 第25回 社会文化研究会 演題「介護保険のイロハ」 講師 小川一代氏
- 9月未定 第87回 秋期のセミナー 演題 未定 講師 山谷えり子先生
- 10月18日(木) 第26回 社会文化研究会 演題「民主主義の本質と欠陥(1)」 講師 田邊拙氏
- 11月 第88回 秋の文化祭 未定



(写真はイメージです。)

平成 31 年

- 2月 第89回 新春セミナー (講師未定)
- 3月14日(木) 第27回 社会文化研究会 演題「民主主義の本質と欠陥(2)」 講師 田邊拙氏



ご寄付を賜りました

田邊拙	¥ 50,000
中井盛久	¥ 21,000
合田三条子	¥ 20,000
東海林令子	¥ 20,000
守屋敏子	¥ 20,000
上野賢	¥ 10,000
平野寛明	¥ 10,000
伴野敏子	¥ 6,000
石井明	¥ 5,000
北島三江子	¥ 5,000
小林美恵子	¥ 5,000
小林元子	¥ 5,000
斉藤貞夫	¥ 5,000
柴原勝	¥ 5,000
松岡由樹	¥ 5,000
野口康成	¥ 3,000
林千賀子	¥ 3,000
水上美紗子	¥ 3,000

田邊拙理事長からのメッセージ
歴史と文化を失った民族は衰頹すると、過去の歴史は教えています。その歴史の中でもっとも大切なのは教育です。この戦後教育の影響で、日本人は礼節、勤勉、思いやり、慈しみ、感謝等日本の心と日本人独特の美的感覚を失い、家族制度まで崩壊してしまいました。今回の「さつきセミナー」では日本の教育に警鐘を高く鳴らし続ける高橋史朗先生をお招きいたします。高橋先生のご著書は「悩める子供たちをどう救うか」(PHP 研究所)、「教科書検定」(中央公論社)など多数ありますが「環して」もう一度見直そう、日本」という私たちの合い言葉と同じ姿勢を貫いておられます。みなさまも是非セミナーへのご参加をお願いして止みません。



「日本のあり方」

講師 ケントギルバート先生

「日本のどこが好きか」
 この答えを真剣に考えると、結局は「日本人が好きだ」となる。もう少しいえば国民性が好きだ。それは真面目、誠実、正直、優しさ、思いやり、協調性、礼儀・・・
 東日本大震災や熊本地震の時、暴動や略奪が一切なかったことを、全世界が高く評価している。被災者も辛抱強く優しかった。
 二〇一四年サッカーのワールドカップブラジル戦で、日本は初戦でコロンビアに敗退。その試合終了後、日本のサポーター達は自分たちのところはもちろん、相手チームのスタンドのゴミまで片付けていた。その写真が全世界に流れた。感動を呼んだのは日本人の美しい国民性だが、外交に関してはマインナスに働く。
 「日本人は争いを好まない」た



ケン・ギルバート 弁護士、日本でも外国人タレント、俳優、著作家として活動。2018年4月より岡山理科大学客員教授。著書『日本を愛した日本人の歴史』など多数。

めに取り合えず謝ってしまう。例えば韓国では謝るといふことは、自分で非を認めたのだから、一生相手に隷属することになってしまう。従軍慰安婦問題が解決しないのは、時の政府代表が謝ってきた結果だ。終戦から今まで日本は謝り続け、金を出し続け、これからも変わらないうら。次に考えたいのは、日本の憲法の在り方になる。
 日本の憲法はマッカーサーによって骨子が作られた。GHQ案が元になっている。GHQは日本人はすべての

国民が軍国主義者だという、中国のプロパガンダの影響を受け、ウォーギルドインフォメーション（戦争についての悪影響を植え付けるための宣伝計画）により、自虐史観を植え付けることに成功した。
 その結果平和を他国に依存する奇妙な愛国心が生まれた。その象徴ともいえる「平和ボケ」を、正しく翻訳すると「誰にも特に努力しなくても現在の平和が永遠に続くという勘違い」になるのである。
 「平和」の概念の一つは、国境が確立されていることだが、竹島は？ 尖閣諸島は？ 北方領土は？ どうか。
 実際はまだ確立できていない。今の日本人はそんな危機感が欠如している。
 「平和」とは戦争状態ではないことを意味するのではなく、戦争状態にさせない努力があつてこそ、可能である。
 しかし日本は憲法九条によって、軍隊はもろろん、交戦権さえ認められていない。これは「平和憲法」ではなく、「平和」をアメリカに依存し懇願しつづける否定すべき恥ずかしい憲法といえる。

国際社会の一人として日本は国益を守るために、反対意見は考慮しても国益を何においても最優先にする行動を取る必要がある。
 そのために妄想でしかない平和依存型の憲法を改正し、真の独立国家として自立できる憲法にする時期に来ている。
 何度も何度も繰り返すが、そろそろ日本人は目を覚ます時を迎えている。
 経済、科学技術、東洋一の軍備、そして世界に誇るべき国民性、日本は大国としての自覚を持ち、完全自立した国家を目指すときである。
 そのための憲法九条の改正が早急に求められている。



今年出版されたケント・ギルバート氏の最新刊。

「日本人が失ったもの」

講師 宮田修先生

NHKを退職後、神主になって、本当に良かったと思つている。かつての先人達の考えてきたこと、やつてきたことを知ることができた。
 今はどうか、先人達の考えを七十年ほど前に、日本人は一気に失ってしまった。
 それは時代の流れかも知れないが、それで日本人は幸せになつたか。
 神主には四つの階位がある。上位から順に淨階、明階、正階、直階だが、それぞれに、きよらかに、明るく、正しく、正直に生きることを表している。
 これが日本人が目指す心の持ち方だった。なぜ日本人はこの心を持ったのか。
 それは日本という国が、世界の中で絶妙な位置にあつたからだ。大陸との適度な距離は、その文化を受け入れるも閉ざすのも選択できるものであり、また



1947年千葉県生まれ。NHKの元エグゼクティブアナウンサー。現在は神職で、せしモアつくば事務所執行役員。著書『危機報道-その時、わたしたちは』、『ここを案にする生き方』など多数。

四方を海で囲まれているため、外国から攻められることがなかった。(元寇、いわゆる蒙古襲来と世界大戦は例外) このため日本人は良いものを取り入れる素直さと、創意工夫を重ねる価値観を育んできた。
 その中で日本人は何をしてきたか。人はどう生きるべきかという「道」を探し求めた。それが柔道、剣道、茶道、華道等に具体化され、それらを学びながら同時に「道」を探し求めていた。

実は相撲も正しくは相撲道であり、もともとは神事だった。神に奉納するためのものであり、勝負が目的ではなかった。相撲の稽古をしながら力士達は、人はどのように生きるべきかを模索している。
 それが相撲道の本質でもある。ところがモンゴルの力士達は、いつも他民族と戦つてきた歴史があり、土儀は男と男の決戦の場所であり、勝たなければならなかった。
 勝つためには「かち上げ」「張り手」など何もありの見苦しい相撲になる。
 禁止手でなければ何が悪いという姿に、もはや道を求める姿はどこにもない。
 人の生き方を考えない力士は、暴力でものごとを解決する生き方にもたぬらはない。
 禁止手ではなくても神の前に美しくないなら行わない取り組言葉で表されている。
 それを失いつつある日本は、もう一つの大切なものを失つている。
 それは「命」。
 今は子供を「作る」という表現になつてしまふ。

自分たちで作つた子供は、自分の都合で墮ろすことを無自覚にも選択する。
 一日平均五百人の命が、親の都合で奪われている。
 本来子供は授けられ、神から預かつた命という考えが日本人にはあつた。
 日本人の生命観は、一つの命はご先祖様から引き継がれた、預かっている命であり、それが次の世代に伝えて、永遠の命になるというものであった。
 この生命観こそ、戦後日本人が失つた最大のものと言えるだろう。



「ここを案にする生き方」は日本人の生命観がとも分りやすく離れております。



人間魚雷であった「回天一型」は迎撃艦の大展示場に堂々と構えていました。じいーと見入って、しばらく動かなかった若者、

沖縄で戦死した息子に捧げられた花嫁人形。「日本男子として生まれ、妻も妻らず逝ってしまった貴殿を想うと涙が止まらぬ。今日ここに日本一美しい花嫁の娘さんを貴殿に捧げます。」(原文ママ)と手紙が添えられておりました。



道達寺の法要、河野長夫さまより精進寺の米を戴きました。



冷たい雨の靖国神社でした。
清楚極まる花嫁人形に胸を熱くしながら、
お人形さまを送った親御さまや恋人たちの心に思いをはせました。

眞崎彌壽子



雨の靖国神社
新嘗祭と「田んぼのお茶事」



「日本福ひとつととも、じつに素晴らしい日本。五穀豊稔の象徴である新嘗祭に会員の皆様と参河できた喜びは、私たちの誇りとなりました。」田邊理事長の挨拶から始まり、高橋史郎理事長からは、喜びの朗読が披露されました。

新田高久子先生のご指導のもとに「田んぼのお茶事」がはじまりました。「田んぼの村さま」のお茶など、とても興味が湧きました。



いよいよ茶会の会場です。初めての方も楽しく全員でお茶を点てました。お茶事は、お土産として戴きました。



正しいお茶の持ち方など、大切な「お行儀」を習得。

私の新嘗祭

眞崎彌壽子

十一月二十三日、冷たい雨の中、Gジャパンの皆様と靖国神社新嘗祭昇殿参拝に行きました。

新嘗祭・・・なんと懐かしい言葉でしょう。今は勤労感謝の日ですが、戦前、戦中、戦後を生きてきた私には、大事な学校行事の一つでもありました。

待ちに待った当日は、あいにくの雨でしたが大勢の方が参集殿に集まってくれました。それから本殿に案内され、

拝殿で厳かな儀式に臨みまし。吹きさらしの拝殿は、激しい雨に囲まれ、冷たい風が容赦なく忍び寄り、私は小学生の頃の校舎を思い出していました。

いつも校長先生の長い長い話があり、そのたびに私は具合が悪くなり医務室行きてました。なつかしい思い出の一つです。

こうして暖房の部屋が当たり前の現代に、身も心も吹き曝された厳かな素晴らしい時を過ごしました。

拝殿には、全国から寄ってきた新米がずらりと並べてありました。長崎県や天草など、懐かしい九州の地名を見ながら本殿に進みました。

靖国神社の大鳥居は知っていても、こんなに奥深く、本格的な行事に参加させていただいたのは初めてで感無量でした。その後靖国会館で増淵喜子先生のお琴に迎えられて、優雅な一時を過ごしました。

田邊理事長のGジャパングロンティア協会の名前の由来を聞きながら、見過ごしてきた日本の伝統文化に改めて感じ入りました。



冷たい雨の靖国神社でしたが、お陰さまで身がキリリと歸まり、本殿に向かいました。

日本人の民度の高さは和の精神や美的感覚が核になっている等、日本の伝統的精神文化の表れと、興味深く習得しながら拝聴させていただきました。

その後高橋史郎先生の謡曲「紅葉狩り」を拝聴し、久しぶりに戸隠山の鬼女に思いをはせました。それから、坂田喜久子先生のユニークな「田んぼのお茶事」が始まりました。お茶事に疎い私には、初めて聞くなんとも気になる可愛い表題でした。

紋付きに威厳を正した坂田先生に、いろいろとお作法をお教えたがきながらの、楽しいお茶事が始まりました。品格のある、美しい和服姿の半東さん達が、控えめにそれでいてテキパキと、お給仕をしてくださる立ち振る舞いの中に、私は日本の美しい精神文化の神髄を見せて戴いたような気がいたしました。

そして最後のお茶も、半東さんたちにご指導いただきながら、参加者全員でお茶を点やげに戴いたり、とても行き届いたプランに感謝、充実に

た雨の新嘗祭を終わりました。私はその後一人で行きたいところがありました。

遊就館です。長年、願っていた零戦や人間魚雷「回天」(かいてん)を初めて見る事ができました。特攻隊員の遺書は二十四歳位からだんだんと十八歳、十七歳と若くなっていました。

私の主人は最後の第十五期海軍甲種飛行予科練習生でした。当時十七歳の彼の乗るべき飛行機はなく、人間魚雷の順番待ちで終戦を迎えた・・・と聞いていました。

遠い昔の話です。展示された「回天」の内部の挟きと、教体展示された花嫁人形に胸を熱くしながら、人形を送った親や恋人の心にも思いをはせました。

そして簡単に彼らの事を「かわいそう!」と言つてもいたくない・・・と思えました。

時代の流れとはいえ彼らはこの美しい日本と、愛しい家族を守るためプライドを持って逝つたのですから・・・帰る頃はうそのような青空になっていました。

「黄金のアデーレ」鑑賞会

高橋史郎

「映画とお食事会のタベ」のご招待を田邊理事長から受け、素晴らしい映画を見る事ができました。

主演はアカデミー賞女優のヘレン・ミレン。

第二次大戦中ナチスに奪われた「オーストリアのモナリザ」と称えられ、国の美術館に飾られてきたクリムトの名画「黄金のアデーレ」を私に返して欲しいという訴えを二十世紀末にアメリカに住む八十二歳の姪のマリア・アルトマンがオーストリア政府に起こし世界が驚天した。

この訴えは当初オーストリア政府が真つ向から反論し大勢が敗訴を予想したが、八十四歳のアルトマンの執拗なまでの信念と、駆け出しの若手弁護士ランディの信念とで最後に逆転勝訴を勝ち取る。

最後に明かされるこの真実は、我々に、前へと進む力をくれる希望と感動の实话をヒューマンドラマで(〇二五年

英米共同制作で、サイモン・カークティス監督により映画化された。この様な歴史を伝える映画がある事を私は初めて知ったが、私の様に知らない人が沢山いることは惜しい事だと思う。



「戦花」では、理事長を中心にクリムトやワインの展で賑わいました。

鑑賞後の懇親会は和菓子料理店「瑞花」で、新しい会員さんの自己紹介や感想を聴きながらのとても楽しい秋のひとときでした。有難うございました。

新しいシャンソンと朗読のタベ

坂田喜久子

松峰綾音さんのライブにGJFのお仲間と一緒に行きました。会場は市ヶ谷砂土原町の「劇空間えとわろ」です。

ライブのテーマは「雨」。この日は雪でも落ちてきそうな寒さで、皆さんと会場に入り

ワインなど頂きホッと一息ついたころ、青色のドレスを纏われた綾音さんの登場そして朗読。『濡れはしないが何とはなしに肌の湿る霧のような春雨だった』川端康成「雨傘」

しつとりとした雨の情景、少年と少女の初々しい恋のひとこまが、綾音さんのおだやかで心地よい声に乗って川端文学の世界へ私たちを誘います。「蝙蝠傘の詩」黒田三郎、「落葉松」北原白秋、「朗読は続きます」。そして綾音さんこだわりの訳詞でシャンソンの名曲を情感たっぷりに歌います。まるで音の波の上に言葉が乗っているかのよう。直接胸に届きました。「リベルタンゴ」も綾音さんこだわりの作詞!



松峰綾音 訳詞ライブ 平成30年10月17日 劇空間えとわろ 日本文学とフランス歌謡の絶妙な出会いを堪能しました。

演奏以外聞いたことがありませんでしたが、すごい迫力で圧倒されました。

美しい音と言の葉のハーモニーに触れ、ひと時、日常の喧騒を忘れることができても幸せな気分になりました。

沢潤の妙を楽しみました。ありがとう! 綾音さん。